

〈著者からひとこと〉

『スペイン美術史入門——積層する美と歴史の物語』

大高保二郎監修・著

久米順子、松原典子、豊田唯、松田健児著

NHK出版 二〇一八年八月

本書は、日本語で初のスペイン美術の通史です。

ヨーロッパの西の果てに位置するイベリア半島は、古代より多くの民族が通り過ぎ、あるいは定着して、多様な文化が蓄積されていきました。南の陽光あふれる地中海、乾燥しきつた中央部のメセタ（台地）、入り組んだリアス式海岸が続く北のカンタブリア海といった複雑な地理環境・風土も、地方色豊かな言語・文化を育む要因となりました。

そんなスペインは、ベラスケス、ゴヤ、ガウディ、ピカソ、ダリといった数々の美術・建築史上の「天才」を輩出したことで知られています。日本に初めて本格的にスペイン美術を紹介した故・神吉敬三先生の遺稿集がいみじくも『巨匠たちのスペイン』（毎日新聞社、一九九七年）と題されているように、二十世紀のスペイン美術史ではとかく、ごく限られたスターのみにスポットライトが当てられがちでした。

しかし、巨匠（オールド・マスター）中心に展開されてきた西洋美術史の流れそのものが二十世紀後半から末にかけて、徐々に変化していきました。日本における第二世代のスペイン美術史家である大高保二郎先生は、基本的には神吉先生の研究路線を踏襲されつつ、ご自身の古稀記念論文選を『スペイン

美の貌』（ありな書房、二〇一六年）と名付けられました。そして筆者自身を含む、より若い世代は、その多くが著名な画家や作品を出発点としながらも、より多様な研究テーマに取り組むようになってきています。本書はこうした状況の中、大高先生の監修のもとに、若手・中堅の研究者たちが、なるべく自分の専門分野に近い時代の美術の流れを大きな視点から捉えようとしたものです。

現代の人文科学研究の傾向からすると、ひとつの国という単位で美術を考えようとする姿勢そのものが、もつと厳しく問われるべきかもしれません。それは我々の世代の今後の課題であるように筆者自身は感じています。

諸事情により巻末に索引をつけることが叶わず、その点で使にくさは否めませんが、スペインへの旅のおともに、あるいは日本でもたびたび開催されているスペイン美術関連の展覧会の前後に、関心のある時代だけでも拾い読みしていただければ幸いです。

（久米順子）

